

マップについて

水防法改正等の経緯と浸水想定区域図の作成経緯

近年、大雨や短時間強雨の発生頻度が増し、大内山川流域での大きな被害のあった平成23年9月紀伊半島豪雨の新宮川水系や、平成24年の矢部川水系において、計画規模を上回る洪水により大規模な氾濫が発生していることから、水防法が改正され、想定最大規模の洪水に対する浸水想定区域図の作成が法的に義務付けられました。

想定最大規模雨量

(24時間雨量 885 mm)	大内山川・頓登川・巾田河内川
(24時間雨量 1,046 mm)	藤川
(24時間雨量 1,089 mm)	注連指川・尾合川・奥河内川・注連小路川・古和河内川・笠木川 三ヶ野川・唐子川・梅ヶ谷川・梅ヶ谷栃古川・栃古川・奥川・二河内川

大紀町洪水ハザードマップの使い方

このマップは、河川の洪水災害が発生した時の被害の想定を示したものです。以下の手順で作業をしてみよう。

1 自宅と避難所の危険度を確認しておこう！

P.9～P.34のハザードマップを見て、「自宅」と「避難所」を探し、●印を記入してみよう。
自宅や避難所にはどのような危険があるかをハザードマップで確認してみよう。

2 避難経路を考えておこう！

自宅と避難所の間にはどのような道があるか、どのような河川や地形に囲まれているかを確認してみよう。

3 マップへ書き込んでみよう！

避難経路を考えた後、洪水ハザードマップにそれぞれ自宅から避難所までの経路をペンでなぞってみよう。

4 早めの避難が重要です！避難開始のタイミングを知ろう！

津波や洪水・内水・土砂災害などそれぞれの災害では早めに避難することが重要です。
P.5～P.8を見て、避難を始めるタイミングを知ろう。

5 災害・避難情報を積極的に集めよう！

災害情報や避難情報は町から配信している防災行政無線情報やケーブルテレビの他にも、テレビやラジオ、インターネット等からも入手できます。それぞれの情報を積極的に集めていくことが命を守るための第一歩となります。(P.4を参照)

わが家の防災対策

避難行動のポイント、危険な場所

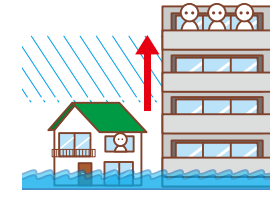
！ 浸水が始まる前に早めの避難を

氾濫水は勢いが強く、大人の膝程度の深さで歩行が困難となる。浸水してから自宅外への避難は危険。気象予報や河川洪水予報などの情報をもとに、身の危険を感じたら自主的に避難を開始する。



！ 状況に応じた避難を

周囲の状況が危険で避難場所まで移動できない場合は、自宅や近隣の頑丈な建物のできるだけ高い階に避難する。移動途中であっても、危険を感じた場合は、近隣の建物のできるだけ高い階に退避する。



！ やむなく浸水の中を歩く際は

裸足、長靴は厳禁。水中で脱げづらい紐靴などが適している。また、氾濫水は濁っているため、水面下が確認できない。長い棒などを杖替わりとし、側溝やマンホール、障害物に注意する。



！ 川や用水路に近づかない

降雨が続き不安に思っても、川や用水路、田畑の用水は見に行かない。やむを得ない場合は複数人で行動する。河川の様子を確認は、自治体などのライブカメラ情報を活用する。また、避難の途中でも増水した川の近くを通るのは避ける。



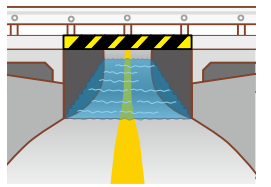
！ 地下室、地下街は危険

地下にいる場合、地上の様子が把握しづらく、避難経路が限定される。また、地上が冠水すると、一気に水が流れ込んでくる場合もある。停電の可能性も高く、脱出が困難となる。



！ アンダーパスは危険

道路や線路の下をくぐるアンダーパスや地下道は、洪水の際、真っ先に浸水する。場所を把握し、迂回路を想定しておく。

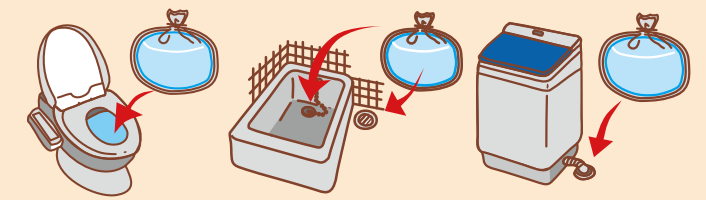


(ページ内の図表は気象庁ホームページより抜粋、編集)

住宅の浸水被害を防ぐには

浸水深が小さいときは、家庭にあるものを使って、水の浸入口となる場所を塞ぐことで水の侵入を減少させることができます。トイレなどの逆流防止にも有効です。

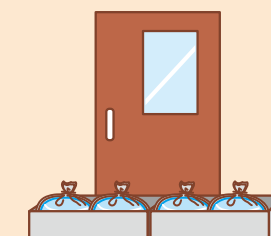
※実施の際には避難の妨げにならないように気を付けてください。



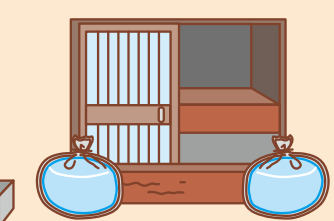
排水口からの逆流対策に

「水のう」の作り方

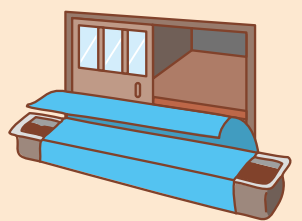
40L程度のゴミ袋を二重にして半分程度の水を入れて、空気を抜いて口をしぼる



段ボール等に入れて並べる



長めの板状のものと組み合わせ、水を止める



土を入れたプランターをレジャーシートなどで包むのも有効